

野鳥だより

—北海道—

ISSN 0910-2396

北海道野鳥だより第211号

編集・発行 北海道野鳥愛護会

発行年月日 2023年3月21日

コミミズク



2022.11.18 胆振管内厚真町

撮影者 新城 久（札幌市北区）



も く じ

希少ガンの渡り復活 山階賞とラムサール賞を受賞して 日本雁を保護する会会長 呉地 正行	2
【野鳥情報コーナー】 道南初 ハシグロヒタキの観察 北海道大学 安田 直矢、阿部 浩太郎	4
千歳・長都沼近くに2羽のカナダヅル 札幌市白石区 佐藤 ひろみ	4
十勝地方 夏季にズグロカモメ 帯広畜産大学 及川 樹也	5
冬の稚内港7羽のソリハシセイタカシギ 北海道大学 和賀 大樹、川森 日向、外岡 隼	5
【私の鳥見スタイル】北海道から広島へ 見られる鳥の違いに興味津々 広島大学 齋藤 佑朱	6
【バードウォッチャーズ・スケッチブック】給餌? いいえ、食害です スズメ 札幌市中央区 本間 康裕	8
【市町村の鳥】旭川市 キレンジャク 雪とナナカマドと冬を彩る 札幌市中央区 國本 昌秀	10
チュウサギ 日高で北海道冬季初記録 野幌森林公園初記録 札幌市北区 新城 久、厚別区 早坂 泰夫	12
探鳥会ほうこく	13
【鳥news】紋別市コムケ湖 観察40年 ソデグロヅルで確認300種に 紋別市 大館 和広	14
鳥民だより 【会員一筆】札幌市南区 小堀 煌治 【表紙の鳥】札幌市北区 新城 久	15
探鳥会あんない	16

※本誌に掲載する写真のカラー版は、当会ホームページ(<https://aigokai.org>)で閲覧することができます。

希少ガンの渡り復活 山階賞とラムサール賞を受賞して

日本雁を保護する会会長 呉地 正行

昨年(2022年)は特別の年になりました。それは、日本雁を保護する会として山階芳麿賞を、個人としてラムサール賞をダブル受賞することができたからです。

山階芳麿賞は、日本の鳥学や鳥類保護に顕著な功績があった個人、団体を2年に1度表彰する賞で、今回が22回目になります。受賞者には著名な方が名を連ねて、団体の受賞は2例目です。国際協力のもとでガン類の保護・調査・研究を半世紀間行い、日本のヒシクイの半数以上が亜種オオヒシクイであることを明らかにし、首環や発信器調査で渡り経路を解明し、生息地保全にも貢献した点と、ほぼ絶滅したシジュウカラガンとハクガンの復活が高く評価されました。

ラムサール賞は、世界中の個人、組織、政府の中で、湿地の保全と賢明な利用促進に貢献した者を、3年ごとのラムサール条約締約国会議で表彰する国際的な賞です。日本人では3人目ですが、ワイズユース部門では初めての受賞です。受賞理由は2つあります。ひとつは山階賞でも評価された渡り鳥ガン類の渡り経路の解明と保護、及び米科と国際協力シジュウカラガンとハクガンの復活に貢献したこと。もうひとつはガン類の重要な採食地でもある水田の生物多様性向上への貢献です。ラムサール条約COP10(2008年)で採択された水田決議X.31の起草と、蕪栗沼・周辺水田でのこの決議の実践が高く評価されました。ふたつの受賞を機会にこれまでの長い足跡を振り返ってみました。

くきっかけはロシア人研究者との出会い>

日本へ渡るガンはどこからやってくるのか? この素朴で根源的な疑問は、ガンの繁殖地があるロシアの研究者との出会いにより、解きほぐすことができました。

最初に渡りの道が分かったのは、ヒシクイ(亜種ヒシクイと亜種オオヒシクイ)です。カムチャツカの鳥類学者・N.ゲラシモフさんとの出会いがそれを可能にしました。共同標識調査で、日本へ渡るヒシクイの大多数がカムチャツカの西海岸から飛来、北海道では、亜種オオヒシクイは道北と十勝に、亜種ヒシクイは道東に多く、本州では日本海側に前者が、太平洋側に後者が多いことがわかりました。またN.ゲラシモフさんはシジュウカラガ



日口の架け橋となった鳥類学者ゲラシモフさん
カムチャツカ半島フラマビツキー湖

ン回復計画のロシア側の協力者として、このプロジェクトを成功に導いてくれました。

マガンの調査とハクガン復元計画は、マガダンにあるIBPN（北方生物問題研究所）のアンドレフさんとコンドラチェフさんとの出会いから始まりました。マガンは、コンドラチェフさんらとの共同標識調査で日本へ渡る群れの手掛かりが得られ、その成果はその後のハクガン復元計画で活かされました。

日本雁を保護する会の活動として特にお伝えしたいのが、誰もが「不可能」と思っていた、ほぼ絶滅したシジュウカラガンとハクガンを復活させることができたことです。現在、シジュウカラガンは約1万羽、ハクガンは約2千羽まで増え、各地でその姿を見ることができるようになりました。北海道では、渡りの時期に十勝川下流域で両種の大きな群れがみられ、現在は多くの渡来地でその姿を見られるようになりました。

＜シジュウカラガン 千島列島での放鳥で渡り復活＞

シジュウカラガンは、アリューシャンと千島列島で繁殖し、前者は米国西海岸へ、後者は日本へ渡っていました。

日本の群れは、江戸時代は「仙台周辺で雁を十羽獲ると、七、八羽はシジュウカラガン」（観文禽譜 1831年）と多く、1935年までは宮城県の仙台市と多賀城市にまたがる七北田（ななきた）低地で群れが見られました。しかし1916～30年代に日本政府が毛皮目的で千島列島に放した数千頭のキツネに捕食され、その姿は激減しましたのです。1938年には絶滅したと考えられましたが、1962年にアリューシャンの小島で奇跡的に生き残っていた小群が再発見されました。米国では回復計画が始まり、日本でも1983年に米国から繁殖用親鳥の提供を受けました。繁殖と千島列島エカルマ島での放鳥という40年以上にわたる多くの人々の熱い思いと努力でシジュウカラガンの群れをよみがえらせることができました。その間、様々なことがあり、とてもすべてを紹介しきれませんが、この長い物語は、「シジュウカラガン物語」（京都通信社 2021年）に詳しくまとめてあるので、是非ご一読ください。



シジュウカラガン最後の放鳥をする筆者
2010年9月 千島列島エカルマ島

＜仮親マガンに託したハクガンの渡り復活＞

シジュウカラガン回復計画が始まった10年後の1993年に、ハクガンの群れをアジアに復元する取り組みが、日

ロ米の関係者で始まりました。日本では、明治初期までは、東京湾の隅田川河口付近などに多数のハクガンが飛来しました。この群れをもう一度日本の空に取り戻すのが、この取り組みのゴールです。

その方法は、アジアに唯一残されたハクガンの繁殖地・ロシア北極圏のウランゲル島で採取したハクガンの卵100個を、日本へ渡るマガンの営巣地へ運び、マガンの巣で卵交換を行い、マガンを仮親、ハクガンを子供とする仮親家族を作ります。そして親鳥のマガンの力でハクガンの幼鳥を日本へ導こうというものです。マガンの巣に託しきれなかった卵はふ卵器で孵化させ、成長後に放鳥しました。これらのハクガン幼鳥は日本への渡りを学習し、アジアのハクガンの群れを復元する先駆けとなりました。計画全体は、ここでは書ききれませんが、その全貌は「ハクガンの道100年の空白」（東北放送 1995年全国放送）で、詳しく紹介されました。



ハクガン 2020年11月 秋田県大潟村 細谷 淳さん撮影

＜ガンのいる風景の価値を次世代につなぐ＞

「絶滅した群れをもう一度よみがえらせたい」という熱く揺るぎない思いを持ち、「必ず道はある」と思い続けてきました。何度も危機に直面しましたが、その都度救世主が現れ、運も呼び寄せることができ、それが夢の実現につながりました。既に成果が上がったものも多くありますが、未解決や新たな課題もあります。生息地の拡大は、「ふゆみずたんぼ」の普及で一定の成果は上がりましたが、まだ不十分です。マガンはその数が急増しましたが、生息地拡大と個体数増加問題はセットで考えなければならない課題です。

自然資源としてのガンのいる風景とその価値を次世代に受け渡すことも欠かせません。生きもの離れをしている次世代の多くの若者に、ガンの群れを体感してもらい、その価値を伝える場を増やし、豊かな自然を受け継ぐ体制づくりも不可欠です。

私たちの国際的な取り組みが飛躍的に進んだのは、1991年にかつてのソ連が崩壊し、両者を阻む鉄のカーテンが消え、自由な交流ができるようになってからです。その結果1990年代は最も活発に共同調査を行うことができ、それが現在の成果に結びついています。残念ながら現在は再びカーテンがしまり、以前のような交流はできなくなってしまいました。これは大変残念ですが、将来このカーテンは必ず開くと思います。その時に備えて今はその準備をするときだと思います。

野鳥 情報コーナー

道南初 ハシグロヒタキの観察

北海道大学 総合教育部 1年 安田 直矢
阿部 浩太郎



ハシグロヒタキ 2022.9.12 檜山管内江差町

2022年9月11日、12日に道南地方の檜山管内江差町でハシグロヒタキを観察しました。北大野鳥研究会に所属していますが、会の活動とは別に2人で自転車で道南を一周している最中でした。11日朝に檜山管内せたな町を出発して海岸線を80kmほど南下し、夕方には目的地の江差町に到着。そこで日没までの時間に厚沢部川付近の農道を歩いているとき本個体を発見しました。全く予想していなかった出会いで、ツーリングには重かったですがカメラとスコープを持って行ってよかったです。

中央の尾羽とそれ以外の尾羽の先端が作る黒色部の逆T字模様、その黒色部の広さ、黒色の軸斑と茶色の羽縁をもつ雨覆、嘴基部に接する眉斑のバフ色などの特徴から、ハシグロヒタキ第一回冬羽と同定しました。太陽光が反射して胸から腹にかけての白みを帯びたクリーム色がよく目立ったため、見失っても再発見するのは容易でした。観察地の周辺は刈り取り前の田んぼが多く、そんな中に存在した開けた農地の中で行動していました。ときおり、周囲にいたハクセキレイに追われる様子も見られました。翌日も同個体を同じ場所で確認しています。

ハシグロヒタキは北極圏の広い範囲で繁殖し、アフリカなどで越冬します。北海道鳥類目録改訂4版(藤巻裕蔵 2012. 極東鳥類研究会)とその補遺には、天売島1986年5月、焼尻島1998年5月、涛沸湖1986年9月、利尻島1997年6月、礼文島2011年10月の5例が記されています。また、北海道野鳥図鑑(河井大輔ほか 2003. 亜璃西社)では、「焼尻島、利尻島、小清水町、枝幸町北見幌別川などで記録と観察例」とあり、宗谷管内枝幸町のものについては写真が掲載されています。道南地方での例はこの中にはなく、今回の報告が初めてとなります。

千歳・長都沼近くに2羽のカナダヅル

札幌市白石区 佐藤 ひろみ



ガンの群れの中で見えにくい2羽のカナダヅル
2022.10.7 千歳市長都沼付近



2羽のカナダヅル 2022.10.8 千歳市長都沼付近

2022年10月7日朝、千歳市の長都沼周辺の畑にて望遠鏡でガンをカウントしていたときの出来事です。ん？なんか変、と違和感あり。よくよく見るとヒシクイ(亜種オオヒシクイ)やマガンに交じって何やら頸が細くて長い鳥が2羽いるのです。あれれ？ひょっとするともしかしてツル？その2羽はオオヒシクイの背丈とほぼ同じ位で、色も灰色のような地味な色合い。ガンの群れに上手くとけ込んでいます。最初に双眼鏡で眺めた時は気がつきませんでした。望遠鏡でマガン・オオヒシクイと分けてカウントしていた時に初めて眼に入りました。

カナダヅルだ！前年、マナヅルやナベヅルがこの付近に飛来しましたので念のため、よくよく確認しましたが、間違いありません。まさかマイフィールドに現れるとは！僥倖というべき出来事でした。この2羽は少し大小の個体差があり、片方は体色がやや赤土色を帯びていました。

カナダヅルはシベリア北東部や北アメリカで繁殖し多くは北アメリカで越冬し、日本に飛来するのはまれな冬鳥です。2羽のカナダヅル、同一かどうかはわかりませんが、9月にサロベツ原野(サロベツ・エコ・ネットワークのHP)、11月に滋賀県守山市(京都新聞)でも確認されています。

十勝地方 夏季にズグロカモメ

帯広畜産大学2年 及川 樹也



ズグロカモメ 2022.8.18 十勝管内豊頃町 湧洞沼

2022年8月17日、18日に、十勝管内豊頃町の湧洞沼にてズグロカモメ1羽を観察しました。17日の夕方、フィールドスコープで約1.5km先にひらひらと飛ぶ、キジバト大の白い鳥を発見し、その形態や行動からアジサシ類または小型のカモメ類のいずれかの種であると考えました。翌日に同所で詳細に観察を行い、頭部にフード状の黒色部、目の周囲に明瞭な白色部、嘴が太く短く黒色、翼下面に黒色部が見られるなどの特徴から類似種のヒメカモメやユリカモメ、ボナバルトカモメではなくズグロカモメと識別しました。

観察中、本個体は水上に浮かぶ流木を休息場所として利用していました。休息している時間が多かったのですが、ときおり沼の岸に沿って飛行し、ときおり下降して水面に浮かぶ何かをついばむような行動が観察されました。しかし、餌内容は特定できませんでした。観察時、周囲にカモメ類はおらず、常時単独で行動していました。

十勝地方で私は、2021年11月23日に湧洞沼、2022年1月9日に十勝川河口でそれぞれ幼鳥1羽を観察しています(個人的観察)。また、北海道東部鳥類目録(日本野鳥の会十勝支部、2010)によると、2005年3月と2006年5月に十勝管内浦幌町で、1976年10月に湧洞沼で記録があります。

本個体の外側初列風切は激しく摩耗した旧羽であり、これらの旧羽は羽軸の外側が褐色であること、また同じく旧羽の次列風切にも褐色斑が見て取れました。これらの特徴はズグロカモメの幼鳥に合致するため、本個体は第一回夏羽から第二回冬羽に換羽中の個体と考えます。

ズグロカモメは環境省レッドリストでは絶滅危惧II類とされています。国内では主に西日本で越冬する冬鳥であり、北海道での記録は多くはありません。また、全国的にも夏季の観察例は多くないといえることから、本記録は夏季の北海道での観察例として重要と考えます。

冬の稚内港 7羽のソリハシセイタカシギ

北海道大学 理学部3年 和賀 大樹
水産学部2年 川森 日向
総合教育部1年 外岡 隼



7羽のソリハシセイタカシギ 2022.12.4 稚内港

2022年12月4日に稚内市の稚内港においてソリハシセイタカシギ7羽を観察しました。北海道における複数羽かつ冬季の記録は珍しいと思われますので、報告いたします。

この日、私たちはケアシノスリをはじめとする冬の猛禽類を観察しようと、北大野鳥研究会の活動で宗谷地方を訪れていました。午前7時ごろに宗谷岬に到着し、海上を飛翔する複数のヒメウなどを観察しました。しばらく観察を続けたあと、港にたまる海ガモを観察しようと稚内港へ向かいました。

午前8時ごろに港に到着し、観察を始めるとクロガモやシノリガモが目に入りますが海ガモの数はそれほど多くありません。すると沖合の堤防沿いに東側から西側へと海上を飛翔する複数の白い鳥が目に入りました。その鳥を双眼鏡で観察してみると白を基調とした色味に肩の黒色模様が目立ち、その飛び方からも瞬時にソリハシセイタカシギだと思いました。

「これアボセット(英名)じゃない?」と川森が言い、確認のため外岡が写真を撮りました。画像を拡大すると戻った嘴が特徴の7羽のソリハシセイタカシギであり、3人とも驚きを隠すことができませんでした。その後降りることなく堤防を越えて飛び去ってしまい、再発見をすることは叶いませんでした。

近年での本種の北海道における記録として千歳市(2022年6月)、コムケ湖(2017年5月)が「北海道野鳥だより」で報告されていますが、いずれも単独個体かつ初夏の記録であり、冬季における複数羽での記録はまれであると思われます。この日は雪と風ともに強かったため、荒れる道北の海上を舞うソリハシセイタカシギはとても印象に残りました。私たちの観察の前後の情報があれば、読者の方にご教示いただけると幸いです。

私の鳥見スタイル

北海道から広島へ 見られる鳥の違いに興味津々

と 朱 佑 藤 齋 2年 広島大学

<私を鳥見の世界へと導いた鳥>

2013年7月下旬、当時小学6年生だった私は、母の友人に会うために天売島を訪れることになりました。ここで昼間島から離れていた海鳥であるウトウたちが一斉に帰巢するのを間近で観察することができる「ウトウ・ナイトウォッチング」というネイチャーイベントに参加することになりました。このころは全くと言っていいほど鳥に興味はなかったのですが、当時好きだった鉄道を撮るために両親に買ってもらったエントリーモデルの一眼レフとキットレンズの望遠レンズで鳥たちを撮影してみることにしました。

日没近くの暗い時間帯だったので飛んで戻ってくるウトウたちを綺麗に写真に収めるということは当時の私の撮影技術では不可能に近かったのですが、圧倒的な数のウトウが一斉に島に戻ってくるシーンにはとても感動したのは今でも覚えています。

まるで黒い塊が隕石のように自分たちの近くに落ちてくるかのように、それもものすごい数で… 道路沿いの巣の近くに降り立ったウトウは何枚か撮影することができました。中には十数匹の小魚を突起のついた特徴的な嘴に咥えて戻ってくる個体もありました。この圧倒的なシーンを見た感動と、野鳥を撮るというなかなか思い通りにはいかない、なんとも言えない楽しさが私を鳥見、鳥撮りの世界へと導くきっかけになったのは間違いありません。



鳥見のきっかけとなったウトウ 2013.7.28 天売島

もし皆さんがこのツアーに参加したことがないのであれば、ぜひ一度は参加してみたい。鳥好きならば百パーセント大満足できると思います。

<バードウォッチングのさらなる深みへ>

江別市のある自宅からそう遠くはない場所に石狩川の水害を防ぐために行われた河川のショートカットの際にできた三日月湖があります。ここには数多くの野鳥が訪れるようだったので、幾度か通ってみました。結構面白いように野鳥を観察することができたのでこれで完全にバードウォッチングにハマってしまったと思います。春

に雪に覆われていた湖の氷が解け始めたころにはハクチョウやカモ、オジロワシなどが、秋にはシギ・チドリやハクチョウ、ガンなどが観察でき、周辺の草原では夏の草原性の野鳥も観察できました。渡りの時期には結構変わった鳥が見られることもあり、ここでは今まで100種類ほどの野鳥を数えてきました。自宅からそう遠くない場所でこれだけの野鳥たちが見られるなんてやっぱり北海道は自然が豊かなのだと思うされるものです。

鳥見に夢中になっていたある日、母から10月に宮島沼で北海道野鳥愛護会主催の探鳥会があることを聞き、参加してみることにしました。その探鳥会では大ベテランの先輩方から野鳥の特徴や識別方法、探し方などたくさんのお話を教えていただき、とても貴重な経験ができました。そして愛護会に入会させていただき、ことあるごとに探鳥会に参加し、たくさんのお話を学ばせていただきました。この場を借りて感謝申し上げたいと思います。

中学、高校と進学した後も時間を見つけては、北海道各地、ときには海外なんかに鳥見に行き、着実に観察した野鳥の種類を増やしていきました。そして、大学入学を機に広島に移り住むことになりました。

<北海道の鳥、広島鳥>

広島で暮らし始めて、北海道とは見られる野鳥の違いがあることに気がつきました。気候も違えば、環境も違うのだから当たり前なのでしょうが、北海道では見られなくて、広島では見られる野鳥が多くいることに気づかされました。その代表例がジョウビタキだと個人的に感じています。

広島では10月中旬ごろになると、冬鳥としてジョウビタキがやってきて、身近な公園や農耕地など至る所で観察できるようになります。警戒心の弱い個体も結構いるようで、手の届きそうなく目の前まで寄ってくるような個体も珍しくありません。私が初めてジョウビタキの雄を見た時には、お腹の美しいオレンジ色とヒタキ類特有のクリっとした目、可愛らしい表情に心を打たれたものです。



ジョウビタキ (雄) 2022.11.3 東広島市



ジョウビタキ(雌) 2022.3.30 東広島市

多くのジョウビタキを見ているうちに、ジョウビタキは1羽で毎回同じような場所で見られることが多いということに気がついてきました。1羽なのでもちろん雌雄一緒に同じような場所にいることはほとんどありません。どうやら自らの縄張りを持ち、そこに長い間滞在するようでした。それにほかのジョウビタキがその縄張りに現れようものなら、必死に追い返す様子からも縄張り意識の強さを感じることができました。こうやって野鳥を観察していると、こんな発見をできるのもバードウォッチングの非常に面白いところだとしみじみ感じます。

他にもジョウビタキに少し遅れて、ルリビタキもやってきます。ルリビタキは北海道では大雪山系などの高山、札幌市内では春秋の渡りの短い時期にしか観察できないような野鳥なので、冬の間、青色の美しい羽色をじっくり観察できるのは嬉しいものです。

農耕地などでも北海道と違った野鳥が見られます。春にはキジ(北海道にいるコウライキジではなく本州のキジ)がいたる所で鳴いていたり、田植えが終わったところにはケリが住宅街に囲まれた田んぼで繁殖し、可愛い雛が見られます。秋にはコウノトリが飛来し、冬から春にかけては、タシギやタゲリ、チョウゲンボウがやってきて越冬する様子を観察できたりと…北海道とは別世界です。



キジ 2022.3.31 東広島市



ケリ 2022.6.9 東広島市



コウノトリ(左) 2021.10.24 東広島市

一方、北海道では簡単に見られますが、広島では見られないような野鳥もあります。ぱっと思いつくものでもアカゲラやハシブトガラ、ヒガラ、ゴジュウカラなどがよく当てはまると思います。あの人懐っこく可愛らしいハシブトガラは日本では北海道にしか生息しない野鳥ですし、ヒガラやゴジュウカラは平地で身近に観察できるような野鳥ではありません。特にアカゲラがこれほどまでも見ることができないとは思ってもいなかったので、少々寂しさを感じたりもします。というのも広島に来てからは一度もアカゲラを見たことがありません。鳴き声すら聞こえないのです。

また、北海道では夏に見られるような野鳥が、冬鳥としてやってくるものもあります。アオジがそれに当てはまります。北海道では4月ごろの早い時期に渡ってきて、目立つ場所にとまり、森に美しいさえずりを響かせる黄色い美しい鳥です。しかし、広島では冬に越冬のために飛来し、囀りを聴かせてくれることはなく、しかも藪の中に潜み、なかなか姿を現さない、地味な野鳥の印象を受けます。さらに、ウグイスは留鳥として生息し、冬でも見られるため、春の鳥という印象が一気になくなってしまいました。

今回書けたのは一部に過ぎないのですが、広島に住んでみていろんな違いを体験することができてとても興味深いです。拙い文章ではありましたが、ここまで読んでくださりありがとうございます。

バードウォッチャーズ・スケッチブック

給餌? いいえ、食害です スズメ

札幌市中央区 本間 康裕

＜清少納言の観察力 さえずらないスズメ＞

「うつくしきもの 雀の子の鼠鳴(ねずな)きするにをどり来る」。ご存じ、清少納言の枕草子の一節です。高校時代、古文の授業をないがしろにしていたので、ちゃんとした現代語訳はできません。でも、この場合の「うつくし」は「きれいさ・うるわしい」というより「愛らしい・いとしい」という意味なので、「かわいいものといったら、スズメの子がちゅんちゅんとネズミのような鳴き声で跳ねて来る姿よね!」といったところでしょうか。



ドウダンツツジの枯れ枝にとまるスズメ 2017.12.30

枕草子を引くまでもなく、庭先のスズメはかわいいものです。そして「鼠鳴き」というのにも含蓄があります。スズメは、複雑なさえずりをしません(「コンサイス鳥名事典」(三省堂)はニューナイスズメの項で「スズメと同様に囀りを持たず」と説明しています)。

そこを指摘した清少納言の観察眼のこまやかさ、ここに極まれり、というところでしょうか。平安時代の歌人たちは多くが貴族階級に属していて、美意識や審美眼は素晴らしいのですが、庶民の暮らしは一切知らない、なにせ、お百姓が脱穀しているのを初めて見て驚いたというぐらいです。なので、全面的にほめるわけにはいかないのですが、こまかいところまで観察していることには脱帽です。

と、ここまで書いて気が付きました。おとぎ話の「舌切り雀」、あれは「宇治拾遺物語」などが元の話のようですが、その内容はというと、「優しいおじいさんがかわいがっていたスズメは、いじわるおばあさんが作った糊をなめたため、舌を切られて逃げ出した。捜しに行ったおじいさんはスズメのお宿で、お土産のつづらをもらっ

て…」といったものです。そこで、ずっと気になっていたのが、どうしてスズメは舌を切られるのか…。翼や尻尾ではなく、なぜ舌を?

糊をなめてしまった罰ですが、いかにも唐突です。ひょっとすると、これ、昔の人が、スズメはスズメ目の鳥(小鳥の仲間)なのに他の鳥のようなさえずりをせず、舌っ足らずにチュンチュン鳴くだけなのに気づいていたからかもしれません。おとぎ話も馬鹿にできない!

＜サルモネラ菌の脅威 餌台とスズメ＞

スズメはこうしてかわいいので、ついつい餌をやっけてしまいがちです(実はかわいくみえるのは、ほっぺの黒斑で、目つきは意外に鋭いのですが)。向こうもそれを知っているのか、人家の近くで餌を拾い、時には糊をなめて来たりもするのでしょうか(本当かなあ?)。餌台を設けた庭には必ずスズメが群れています。～なんて言っていたのは昔の話(2000年代の最初の10年ぐらい?)。いまでは「野生動物への給餌はやめましょう」と、自宅庭に餌をまく人はほとんどいなくなっていました。



頬の黒班がかわいい 2021.1.14

北海道で野鳥の餌台が姿を消すきっかけになったのが、2005年から06年にかけての冬に起きたスズメの大量死でした。札幌や旭川などの家庭の庭先で、死んだスズメが次々と発見され、北海道庁によれば06年7月までに全道で1500羽以上のスズメの死骸が見つかったのです。

その大量死の原因の一つがサルモネラ菌によるものであることを発見したのは空知家畜保健衛生所(岩見沢市)の中野良宣専門員(当時)でした。酪農学園大に冷凍保存されていた64羽のスズメの死骸を検査してつくと

め、2011年9月に北大で開かれた北海道獣医師会年次大会で発表しました。サルモネラ菌には様々な型があり、このとき見つかったのは海外でスパローキラー（スズメ殺し）と呼ばれ、鳥の大量死を引き起こしていた「DT40」でした。国内での発見は初めてで、スズメは渡りをしないので「どこから来たのだろうか？」と話題になりました。

サルモネラ菌は人間の食中毒も起こします。しかも寒さに強い。時々、冷凍食品で食中毒が起きますが、たいがい原因はサルモネラのようなのです。北海道内の厳しい冬、庭先に餌をまくとすぐに凍結します。その上に食中毒菌で汚染された鳥が糞をしたとしても、菌はたちまち死んでしまいそうですが、どっこい、サルモネラは生きています。

なので、厳冬期の緊急給餌のつもりで庭先に餌をまくと、汚染された鳥がやってきて、サルモネラをばらまき、多くの鳥を殺す結果になるのです。つぎつぎと餌台を撤去する家庭が増えていきました。しかし給餌はなくても緑があればスズメは庭先にやってきます。どうやら草の実や庭木のイチイの実を食べているようです。こうして札幌市中央区の自宅庭に来てくれたスズメを描きました。



イチイの実を食べるスズメ 2021.11.16

＜芝の種を食べる目ざとさも＞

さて2021年春、この年はいつになく、雪解けが早く、すぐにわが庭の芝のはげちょろけが目立ってしまいました。そこで、園芸店に行って芝生の土と種を買ってきて庭にまきました。すると、どうでしょう、どこで見ていたのか、スズメが集まって、まいたばかりの種をついばみ始めました。知らない人が見たら、まるで庭先に鳥の餌をまいているように思うでしょう。うーん、これは野鳥への給餌にあたるのか、あたらないのか？ だいたい、園芸店から買ってきた芝の種（決して安くない）をむしゃむしゃ食べるとは、どういうつもりなのか！

おそらくスズメたちは「庭に来た私たちの姿を絵に描いているんだから、芝の種はそのモデル料よ！」とでも言いたいのでしょう（残念ながら、これは清少納言や宇治拾遺物語の伝承者のような緻密な観察に基づく表現で

はなく、筆者の単なる思い込みです）。なお2022年の春も芝の種をまくと同様の状態でした。はたして今年はどうでしょう。



給餌する親スズメ 2022.6.3

さて、スズメは漢字で「雀」。「小」+「隹」で、小さな鳥、スズメを表しています。「隹」は篆書体（ハンコなどに使う文字）で短尾の鳥を示し、長尾の鳥の「鳥」と区別したそうです。「隹」の読みはスイとかサイ。漢字のこの部分を「ふるとり」と呼ぶのは、「舊」（「旧」＝読みはキュウ・ふるい＝の旧字で、「舊日本軍」などと使う）の字の中に「隹」があるから。

一方、スズメは英語でスパローと習いました。スパローといえばジャック・スパロー（映画「パイレーツ・オブ・カリビアン」の主人公）じゃなくて、通常はイエスズメ（英名・ハウススパロー）を指すそうです。で、ウチの庭に集まるスズメは英名・ユーラシアン・ツリースパロー（直訳すれば「欧亜の木雀」か）といいます。イギリスなどでは住宅地などでよくみられるのがハウススパロー。樹木の多い環境にいるのがツリースパローということなのでしょう。

そのスズメことユーラシアン・ツリースパローの学名は *Passer montanus* です。*Passer* はラテン語で「スズメ」のことなので、「そうか、米モンタナ州のスズメなんだ」と思ったら、これが早合点。*montanus* はラテン語で「山の～」という意味なので、直訳すれば「山雀」です。もっとも米モンタナ州も語源は同じ、ラテン語の「山の～」なので、全くの見当違いでもなさそうです。

そして、モンタナという有名人といえば、ジョー・モンタナ（アメリカンフットボールのSF 49ers＝「サンフランシスコ・フォーティナイナーズ」と読んでください＝のQB。1989年、1990年のリーグMVP）。といったところで、アメフトを知らない人には誰のことやらわからない上にスズメとは何の関係もなくなりました。

では最後に観察場所を書いておきましょう。2017年12月30日、21年1月14日、同年11月16日はいずれも札幌市中央区の自宅庭に来たもの。2022年6月3日は知事公館庭園です。

（イラスト筆者）

市町村の鳥

旭川市

キレンジャク 雪とナナカマドと冬を彩る

札幌市中央区 國 本 昌 秀



ナナカマドとキレンジャク 2019.12.31 旭川市工業団地
野村真輝さん撮影

<ナナカマドに似合うキレンジャク>

旭川の市民の鳥はキレンジャクです。日本野鳥の会旭川支部の会報名が「キレンジャク」、「合唱団キレンジャク」や「雪の降る町を 旭川冬の写真コンクール」に「キレンジャク賞」もあります。市民の鳥は「市民ひとりひとりが自然を愛し、自然と対話できるようなまちづくりのシンボルのひとつ」(旭川市)として、昭和53年(1978年)9月に制定されました。ナナカマドが市民の木になったのはその2年前ですが、昭和39年(1964年)から青年会議所が植樹活動を始めたことで、市民に親しまれてきました。冬になると、そのナナカマドに集まって来る鳥がキレンジャクで、共に白銀の北都を彩ります。

キレンジャクはシベリアから冬鳥として渡ってきます。自然界ではヤドリギの実を好んで食べるので、本州ではヤドリギの古名ホヤからホヤドリと呼ばれる地域があります。市街地でヤドリギに代わるごちそうがナナカマド並木の赤い実なのでしょう。旭川の野鳥研究家・石川信夫氏が昭和53年(1978年)に出した旭川叢書『北の野鳥』に、高台の林から数百羽のキレンジャクが民家のナナカマドを目指して飛び立つシーンを記し、ナナカマドが市民の木に選ばれたことを「本当に嬉しい」と書いています。

旭川市4条通8丁目の旭川信用金庫本店前に旭川生まれの文豪・井上靖の文学碑があります。平成2年(1990年)の開基100年に寄せた詩文です。

「私は十七歳の、この町で生まれ、いま百歳の、この町を歩く。すべては、大きく変わったが、ただ一つ、変わらぬものがあるとすれば、それは、雪をかぶったナナカマドの、あの赤い実の洋燈。(後略)」

井上の詩文にキレンジャクは登場しませんが、しんしんと降る雪をかぶったナナカマドが心を温かく灯すことを物語っています。



ナナカマドを詠う井上靖文学碑 旭川市4条通8丁目

<市内で見つけた“キレンジャク”いろいろ>

多雪の旭川にはキレンジャクから連想した面白い命名があります。旭川空港の就航率99%の理由は除雪隊のWAX WINGS(ワックスウイングス)の高い技術力とチームワークによるものです。



旭川空港除雪隊WAX WINGS
2019年1月の旭川市広報誌の表紙

その名はキレンジャクの英名ボヘミアン・ワックスウイングに由来します。ボヘミアンは自由な民。翼の一部に赤い蠟状の突起物があるからワックスウイングです。除雪隊WAX WINGSは、冬になると隣町含めた広域から農家の皆さんが集まって見事なチームとなります。その姿をキレンジャクと重ね合わせた命名というわけです。空の玄関口を守る雄姿は市の広報紙の表紙を飾ったこともあります。旭川空港から市内中心部に向かうリムジンバスにキレンジャクが描かれているのも、納得です。



空港リムジンバスに描かれたキレンジャク

市内でキレンジャクにまつわるものがないか探してみました。各地の公園には地下水（井戸）を活用した町内会の「自主防消火栓」があります。シラカバをイメージした柱にキレンジャクやエゾリスのオブジェが座しています。景観に配慮しつつ、しっかりと目印になっています。



「自主防消火栓」のキレンジャク 錦はるかぜ公園

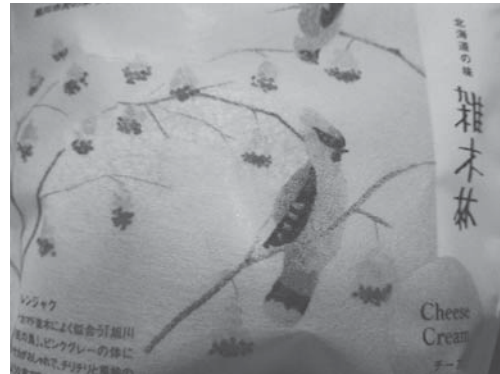


キレンジャクが描かれた風景印
旭川豊岡郵便局

いくつかの郵便局の風景印にキレンジャクが刻まれています。私が調べた範囲ですと、旭川十条、旭川豊岡、旭川神楽岡など11の郵便局の風景印にキレンジャクがいます。ナナカマド、街から眺望する大雪山、市を象徴する旭橋などと一緒に描かれることが多く、爽やかな北都の風景が伝わってきます。

老舗菓子店の壺屋のクリームやジャムを挟んだ焼き菓子「雑木林」。冬限定のチーズクリームのパッケージはナナカマドにとまるキレンジャクです。「雑木林」は昭和34年（1959年）の天皇来道と植樹を記念して発売されたものです。近年になって「雑木林に鳥を呼ぼう」というコンセプトでパッケージをリニューアル、バードハウス（巣箱）の普及に取り組むNPO法人の活動を支援しています。

ちなみに秋季限定はツグミ（レーズンクリーム）、通年販売はシジュウカラ（ストロベリー）、アカゲラ（アロニアベリー）となっています。



壺屋の焼き菓子「雑木林」（チーズクリーム）

＜郷土が生んだ文芸とキレンジャク＞

旭川が生んだ作家といえば三浦綾子です。デビュー作であり代表作の『氷点』と、井上靖のナナカマドの文学碑は少々ですが、不思議な縁があります。

井上文学碑がある旭川市4条通8丁目の一角にバス停があります。『氷点』のタイトルはここで生まれました。創作活動を支えていた夫の光世がバスを待っているときに「人の心が凍てる氷点」という着想を得て、綾子に提案したのです。

さて、綾子はナナカマドが大好きで『ナナカマドの街から』というタイトルのエッセイ集も出しています。冬ばかりでなく、四季折々の姿が旭川らしいと気にいってました。そこで、ナナカマドとキレンジャクが共に描かれている作品がないものかと思い、三浦綾子記念文学館に聞いてみました。丁寧に調べていただきましたが、ナナカマドとキレンジャク、もしくはキレンジャクについての記述はありませんでした。

そこで小説以外で描かれている文芸はないものかと探してみると、ナナカマド、雪、キレンジャクを巧みに詠んだ俳句がありました。

はだかき
裸木に来て雪ふふむ黄連雀 深谷雄大

「雪の雄大」といわれるほど、雪を詠みこんだ旭川の俳人・深谷雄大が平成2年（1990年）に詠んだ句です。奇しくも井上靖のナナカマドの文学碑が立った開基100年の年です。

雄大本人の自解によると「ななかまどの実が落ちてしまってから来た黄連雀、そこに雪を差し出す裸の木がある。永年、見続けてきて、掴んだ一句である」とあります。

口に含む雪を裸木がキレンジャクに「差し出している」という心優しき観察眼。この世は与えたり、与えられたり。キレンジャクを巡る私の小さな旅は、この一句を知り得て終えることができました。

チュウサギ 日高で北海道冬季初記録 野幌森林公園初記録

札幌市北区 新城 久
札幌市厚別区 早坂 泰夫

北海道で近年顕著な増加傾向にあるダイサギの飛来に比べて、チュウサギはずっと少ないのですが、2022年2月に日高管内新ひだか町で北海道の冬季では初めてと思われる目撃がありました。また同年9月には本会本拠地である野幌森林公園で初めて観察されました。それぞれ会員の新城久さんと早坂泰夫さんの観察記録です。

(編集部)

＜冬季初記録 新ひだか町＞ 新城 久

1年ほど前の2022年2月11日、日高管内新ひだか町で、冬季の北海道では初めてと思われるチュウサギを観察・写真撮影しました。

観察日の前日から、冬季の日高海岸線のカモ類を主に見ようとして、国道235号を鷗川漁港(胆振管内むかわ町)を出発点として、いくつかの漁港に立ち寄りながら襟裳岬方面に向かって車を走らせました。日高管内新冠町にある道の駅「サラブレッドロード新冠」で車中泊の後、11日朝に新ひだか町を流れる三石川の橋(三石橋)を渡るとき、ちょっと上流側にある旧JR鉄橋のすぐ手前に3羽の白いサギ(写真1)がいるのが目に入りました。



写真1. 日高管内新ひだか町 2022.2.11

ダイサギだろうと思いましたが、一応確認のため車を脇に止め、歩いて鳥が見やすいところに行き、何枚かの写真を撮りました。どうもダイサギではなくチュウサギみたいだという感じがあったのですが、車に戻って、撮った写真を拡大してみるとやはりチュウサギでした。

ダイサギとチュウサギの識別を、両種が同時に見られる石狩市生振のいしかり調整池で2年ほど前から練習をしていたのが役に立ちました。嘴が短かめ、嘴から頭にかけての線が「おでこ」などから、たとえ比較となるダイサギがいなくても、ほぼ間違いなくチュウサギがわかるようになりました。

＜野幌森林公園への初飛来＞ 早坂 泰夫

2022年9月、野幌森林公園に飛来してきたチュウサギを初めて観察しました。

野幌森林公園には、大沢の池や瑞穂の池、原の池など散策路に面した池がいくつかあり、カモ類などを観察する機会が多くあります。サギ類ではアオサギの他に最近目撃情報が多くなったダイサギが見られますが、チュウサギはこれまで記録がありませんでした。

最初の目撃は9月21日でした。散策の途中、午前10時ごろ大沢の池に着くと対岸の白いサギ1羽が目に入りました。大きさや特徴からダイサギと確認し観察していると、もう1羽、池の北側大沢園地寄りの草や灌木の生い茂る湿地の方から白いサギが現れました。枝や葉、茂った草などで見づらかったのですが、ダイサギに比べてやや嘴が短く、口角は眼の後方を越えていないことが確認されたことから、この個体をチュウサギとみなしました。残念ながら数分間の観察でしたが、後日、会員の池端耕治さんが私の目撃の前日と前々日に同所で同一と思われる個体を撮影していたことがわかりました。



写真2. 野幌森林公園・瑞穂の池 2022.9.28

2回目は瑞穂の池で9月28日、午前9時20分ごろでした。北東方角より白いサギ(写真2)が飛んできて、池の上を数回旋回、ほどなくして、側の岸辺に降りました。このときは10時ごろまでじっくりと観察することができました。今回、大沢の池と瑞穂の池の2か所で観察できましたが、おそらく同じ個体であると考えられます。

同時期、公園内で野鳥観察をしている方々からの情報をまとめると、大沢の池では9月15日から26日まで、瑞穂の池では9月27日と28日に確認されています。



ウトナイ湖 (2022.11.13) は荒天で、小樽港 (2023.1.22) は新型コロナウイルス感染防止対策のため中止しました。野幌森林公園 (2023.1.8) は1月としては初めての定例会開催です。

野 幌 森 林 公 園

2022.12. 4



ウソ 藤吉 功さん撮影

景色のなか、冬鳥のウソとアトリが見られたほか、亜種ハチジョウツグミが観察できました。大沢コースでは遠くにフクロウも確認できました。この時期には珍しいモズが見られたことも特筆できます。

【記録された鳥】トビ、フクロウ、コゲラ、オオアカゲラ、アカゲラ、ヤマゲラ、モズ、ハシブトガラス、ハシブトガラ、ヤマガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヒヨドリ、ゴジュウカラ、キバシリ、ミソサザイ、ツグミ、アトリ、ウソ

以上19種

【参加者】市橋栄二、臼井奈津子・迪、大西智子、大橋路子、奥村七織子、鎌田要子、川端 純、栗林宏三、小西芙美枝、小谷内久江、斎藤亜矢子、佐川健次、辻 雅司・方子、道場 優、富川 徹、畑 正輔、鉢呂まゆみ・星音、花岡俊吾、早坂泰夫、平岡信夫、福士一徳、藤吉 功、松原寛直・敏子、満保光彦・彩女、水上正幸、南 貴和子、武藤幹太、本杉政司・朋子、森岡康志、山本育子、横山加奈子、吉田慶子

以上38名

【担当幹事】道場 優、富川 徹

野 幌 森 林 公 園

2023. 1. 8

江別市 小西 芙美枝

2023年最初の探鳥会はかなり冷え込んだ朝の9時にスタートです。遊歩道は人が歩き固めた一本道、長い一列をつ

くって歩き出します。この森は樹が高く、その枝は白い雪を載せ、鳥たちのとまり木になっています。

歩き始めにはハシブトガラ、シジュウカラが忙しく枝から枝へ飛び移っていましたが、私の双眼鏡にはなかなか入ってくれません。それでも裸眼でそのシルエットを追うだけでも結構楽しいものです。ヤマガラもいると誰かの声もします。さらにエナガがいるという声に、急いでそちらの方を探します。やはり高い枝を比較的長い尾羽のシルエットが飛び交っています。晴れてさえいれば、あの愛らしさをしっかり楽しめたのですが…

アカゲラの雄は落ち着き深い風情で木の低い位置にとまってくれたので、双眼鏡でゆっくり見ることができました。ふたつの脚とそれぞれ4本の爪、しっかりしている尾羽で樹にとまり続ける技はやはり天性のものなのでしょう。

目の前をすーと横に翔んだのは、私には判断が付きませんでした。ウソと教えてもらいました。この森にはカツラの太木が多く、しっかりと実もついています。私の歩く回りにはついでに来てはくれませんでした。

それにしても夏にはよく鳥たちの水浴びを目にしますが、冬の鳥の体は汚れないもののでしょうか。翔びながら雪を受け、とまる枝も雪をまとい、そういう季節では汚れないかもしれない…それを眺め楽しむ私たちの体は生きているだけで汚れてしまうのに。

私が目にした鳥の数はわずかでしたが、最後の「鳥合わせ」では17種でした。私が見なかったシメなどもいました。やはりベテランの目、大人数の目はありがたいものと思います。自分でも見てきたような気分で楽しいひとときを終え、友人の車に乗せてもらって帰路につきました。



シメ 武藤幹太さん撮影

【記録された鳥】コゲラ、オオアカゲラ、アカゲラ、カケス、ハシブトガラス、ハシブトガラ、ヤマガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヒヨドリ、エナガ、ゴジュウカラ、ツグミ、アトリ、カワラヒワ、ウソ、シメ

以上17種

【参加者】石塚 肇、川端 純、國本昌秀、小西芙美枝、小林敦実・恵、小谷内久江、斎藤実咲、佐川健次、佐野純子、高島 均、高島千尋、辻 雅司・方子、坪田亜希子、富川 徹、長瀬真央、畑 正輔、早坂泰夫、福士一徳、

藤吉 功、辺見敦子、松原寛直・敏子、水上正幸、武藤幹太・大翔、山本育子、横山加奈子、吉田慶子 以上30名
【担当幹事】早坂泰夫、藤吉 功

野 幌 森 林 公 園

2023. 2. 5

青空と日差しに恵まれて、会員外11名を含む38名参加という盛況でした。冬鳥で期待していたキレンジャク、アトリ、マヒワ、シメは見られませんでした。ツグミとウソは確認できました。印象的だったのはキバシリのさえずりが聞けたこと、エナガの声に聞き耳を立てていたとき、頭上の青空にオジロワシが飛んだことでした。

【記録された鳥】トビ、オジロワシ、コゲラ、オオアカゲラ、アカゲラ、ヤマゲラ、ハシブトガラス、ハシブトガラ、ヤマガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヒヨドリ、エナガ、ゴジュウカラ、キバシリ、ツグミ、ウソ 以上17種

【参加者】磯田憲和、大西智子、金子国彦、鎌田要子、國本昌秀、栗林宏三、小西美美枝、小谷内久江、佐川健次、

佐藤直美、千坂 野梨子、辻 雅司・方子、坪田亜希子、道場 優、富岡尊広、富川 徹、鳥谷峰 修・心、中村 隆、成田光子、畑 正輔、早坂泰夫、平沢路生、平田修二、福士一徳、辺見敦子、松原寛直・敏子、右谷 誠、水上正幸、宮崎恵子、本杉政司・朋子、森本えみ子、山本育子、横山加奈子、吉田慶子 計38名

【担当幹事】富川 徹、早坂泰夫



オジロワシ 鳥谷峰 心さん撮影



2022年12月

紋別市のコムケ湖

観察40年 ソデグロヅルで確認300種に



ソデグロヅル 2022.12.7 コムケ湖

<文と写真> 紋別市 大館和広

紋別市・コムケ湖のキャンプ場で朝のコーヒーを飲む私に「これなんですか？」と見せられた液晶画面はなんとソデグロヅルでした。撮ったと言う方向をスコープで見ると、あれだ!干潟で寝ているようです。急いで湖口に走り、まず遠くから観察です。ゆっくり接近すると顔を上げました。暗い朝で顔から嘴の色がよく解りませんが初めて見るソデグロヅルです。

暫くして飛んだ時に見せてくれた翼の初列風切はその名の通りに黒く美しく、赤っぽく見えた翼角はまだ幼羽が残っていたようでした。12月7日初認、この日は日没まで見て、凍った干潟の氷を突き割り魚を捕る様子などを観察。8日も同じ所にいました。氷上では足が冷たいのか、片足をたたむしぐさをよくしていました。終認は翌9日で場所を移動しホッチャレ鮭も食べていたようです。

これでコムケ湖の確認鳥種は1980年10月に観察を始めてから300種になりました。最初に見た鳥は忘れてますが、節目に大物?の鳥が出たことの幸運に感謝、見つけてくれたE君に感謝です。それにしてもコムケ湖に来るなんて思ってもいませんでした。

コムケ湖はこの40年でハンノキ林が増えたり、ヨシ原が減少したり、驚異的に海岸浸食が進み環境変化(悪化)が進行中で心配です。

鳥民だより

◆野鳥写真展と写真募集のお知らせ◆

会場：札幌エルプラザ2階 環境プラザ・展示コーナー
(札幌市北区北8条西3丁目)

期間：2023年5月10日(水)～5月23日(火)

展示時間：9:00～18:00

(初日は13:00から、最終日は16:00まで)

応募要領：最近3年以内、原則として北海道内で撮影した写真で、サイズはA4判。鳥の名前・撮影者・撮影年月・撮影場所を必ず添付のこと。1人2枚以内とし、3枚以上の場合は展示優先順位を明記。

募集締切：4月28日(金)まで必着で送付または持参。

〒003-0026 札幌市白石区本通1丁目南2-38

北海道自然保護協会気付 北海道野鳥愛護会宛

展示作業：5月10日(水)10:00から展示作業を行います。
お手すきの方はご協力をお願いします。

【野幌でも開催】

エルプラザに引き続き野幌森林公園自然ふれあい交流館でも6月1日(木)～30日(金)に展示を予定しています。

【お願い事項】

- (1) 作品を、愛護会ホームページに掲載しますので、JPEGデータをご希望の方は6月30日～7月9日に自然ふれあい交流館に自分で取りに来られるか、9月発送の野鳥だよりと同封を希望されるかのいずれかを、応募時に必ず指定してください。
- (2) 作品の返却をご希望の方は6月30日～7月9日に自然ふれあい交流館に自分で取りに来られるか、9月発送の野鳥だよりと同封を希望されるかのいずれかを、応募時に必ず指定してください。

【お問い合わせ】総務 畑 正輔

TEL: 090-3117-4261: ショートメール可

E-Mail: hata2002@lapis.plala.or.jp

◆植苗ウトナイ探鳥会の終了について◆

ウトナイ湖の北岸の植生環境変化や湖に至る散策路の荒廃などで続けるには難しくなってきた「植苗ウトナイ探鳥会」を終了し、これまでお試し探鳥会としていた「茨戸川緑地探鳥会」を定例化することにしました。

◆野幌森林公園を守る会の受賞について◆

当会と協力関係にある野幌森林公園を守る会が、北海道の2022年度「未来へつなぐ!北国のいきもの守りたい賞」を受賞しました。野幌森林公園におけるクマガエラの保全活動が評価されました。(2023年1月29日に授与)

◆総会のご案内◆

日時：2023年4月12日(水) 14:00

場所：かでる2・7 110会議室(1階)
(札幌市中央区北2条西7丁目)

【お問い合わせ】総務 畑 正輔 TEL: 090-3117-4261

【新しく会員になられた方々】

平田 修二(江別市)



餌台にヒヨドリが来ない冬

札幌市南区 小堀 煌治

探鳥会では、オオルリを見つけた、カッコウが飛んだと歓声が上がるが、「またヒヨドリだ」と、ろくに見もせずチェックリストに。毎年根雪の頃から庭に餌台を作っている。餌台設置には是と非の両論があるが、私の場合は鳥への寒施行を建前としている一方、近くでウォッチングの下心もある。昨年も11月下旬、ヒヨドリ、ツグミ用のリングを用意した。キツツキ用の脂身はいつもカラスに横取りされ、色々工夫をするのだがカラスの悪知恵には敵わず降参し断念。例年の一番乗りはヒヨドリだが、今年に入ってもリングに食痕がなく、1月末になって漸く1羽が来た。でもリングの食痕はなかった。こんなことは初めてだ、秋口までは毎日見ていたのだが。近所の給餌台の様子を訊いてみた。皆さんヒヨドリには関心が薄いようで、そういえば姿が見えないね、そんな返事ばかり。

最後の切り札、藤の沢白鳥園の大規模給餌台を訪ねてみた。大量のリングを吊るしている。当主の小沢さんも昨年の秋以降はヒヨドリを見かけないとのこと。リングにも食べた形跡は無い。札幌各地では例年通り普通に見られるらしい。藤野地区の特殊な状況のようだ。いつもは給餌台で歓迎されない客だが白い世界に賑やかなヒヨドリの声が無いのは、やはり寂しい。例年4月頃には南下組が戻って来て給餌台を占領する。春が待ち遠しい。

表紙の鳥

コミミズク

場所は胆振管内厚真町の海岸線沿いに広がるヨシ原です。太平洋岸なので雪が少なく、冬鳥として飛来するコミミズクにとって主食のネズミを狙う絶好の狩り場となっています。

車中泊3日くらいの装備で出かけたこの日は夜明けからカメラを構えました。撮影シーンは午前11時前のことで、首を伸ばして空を見上げたり、しきりに周囲を睥睨してしていました。近くの流木に止まって動かないハヤブサを警戒しての行動だと思いました。

新城 久(札幌市北区)





新型コロナウイルスの状況により中止の場合があることをご了承下さい。

- ☆ 探鳥会（宿泊探鳥会を除く）は、どなたでも参加できます。参加費無料。事前申し込み不要です。直接現地に集合してください。昼食、双眼鏡等観察用具、筆記具などをご持参ください。
- ☆ 集合場所等については、愛護会ホームページ「探鳥地紹介」でお確かめください。
- ☆ 悪天候で中止の場合があります。探鳥地や当日の天候に応じて、防寒着、雨具、長靴等ご用意ください。
- ☆ 探鳥会の開催を変更・中止する場合がありますので、愛護会のホームページでお確かめください。
- ☆ 交通機関の運行時刻等については、最寄りの営業所等にお問い合わせください。
- ☆ 探鳥会の問い合わせ先
北海道自然保護協会 ☎011-876-8546 10:00~16:00 (土・日曜、祝祭日を除く)

開催日	探鳥地	集合場所及び集合時刻
4月16日(日)	モエレ沼	ガラスのピラミッド前 9:30
	中央バス：地下鉄東豊線環状通東駅発（北札幌線東69番・東79番）「モエレ沼公園東口」下車、徒歩10分。 開水後の沼に浮かぶカモ類やオオバンなどの水鳥群、沼畔湿地草原や公園林の小鳥類を楽しめます。	
4月23日(日)	野幌森林公園	大沢口 9:00
	JRバス：新札幌駅発（文京台線循環新83）「文京台南町」下車、徒歩10分。 夏鳥たちが渡ってくる時期です。木々の芽が開き始めた森の中を、鳥たちのさえずりを聞きながら歩きます。	
4月30日(日)	宮島沼	湖畔 10:00
	中央バス：岩見沢ターミナル発（月形線21番）「大富」下車、徒歩15分。 北への渡り途中のマガンたちが集結します。湖面で羽を休め、えさ場を行き来する姿は壮観です。暖かい服装で。	
5月5日(金)	藤の沢	白鳥園（エルクの森パークゴルフクラブ向い） 9:00
	定鉄バス：札幌駅発又は地下鉄真駒内駅発（定山溪温泉行又は豊滝行）「藤野3条2丁目」下車、徒歩15分。 藤の沢小鳥の村とその周辺をウグイスやオオルリなどの声を聞きながらゆっくりと巡ります。	
5月7日(日)	野幌森林公園	大沢口 9:00
	JRバス：新札幌駅発（文京台線循環新83）「文京台南町」下車、徒歩10分。 木の間に見え隠れするキビタキ、梢でさえずるオオルリなど魅力いっぱいです。	
5月14日(日)	千歳川	さけます情報館手前の第一鳥欄橋付近の河畔園地 8:00
	公共交通機関はありません。 千歳川沿いに発電所ダムまで行きます。たくさんの夏鳥が見られます。ヤマセミが出現することもあります。	
5月21日(日)	鶴川河口	道の駅むかわ四季の館駐車場 9:30
	JR日高線：「鶴川駅」下車、徒歩10分。（道南バス札幌発浦河行ベガサス号は休日の早朝便がなくなりました） 鶴川河口と人工干潟のシギ・チドリ類がメインです。時にはチュウヒやハヤブサも現れます。	
5月28日(日)	野幌森林公園（早朝探鳥会）	大沢口 6:00
	早朝のため公共交通機関はありません。 早朝探鳥会です。夏鳥の囀りを聞きながら早朝の森を歩きます。春の草花も真っ盛りです。	
6月4日(日)	茨戸川緑地	茨戸川緑地駐車場 9:00
	中央バス：地下鉄東豊線栄町駅発（栄町・教育大線栄20番）「あいの里4条7丁目」下車、徒歩20分 茨戸川と石狩川に囲まれた茨戸川緑地で草原の鳥を探します。時にはアリスイが姿を現すこともあります。	
6月11日(日)	厚別川	川下公園駐車場 9:00
	中央バス：地下鉄東西線白石駅発（川下線白24番）「川下公園」下車。 厚別川の堤防を歩きます。草原の鳥が勢揃いし、カッコウの鳴き声や姿も期待できます。	
6月18日(日)	野幌森林公園	大沢口 9:00
	JRバス：新札幌駅発（文京台線循環新83）「文京台南町」下車、徒歩10分。 鳥たちにとって一番忙しい子育ての季節です。初夏の花も咲きそろい、鳥と野の花の両方を楽しめます。	
6月25日(日)	福移	福移小中学校前 9:00
	中央バス：地下鉄環状通東駅発（北札幌線東69番）「福移小学校通」下車、徒歩5分。 石狩川堤防沿いの草原や石狩川・豊平川合流点の鳥を楽しめます。	

〔北海道野鳥愛護会〕 年会費 個人 2,000 円、家族 3,000 円(会計年度4月より) 郵便振替 02710-5-18287
〒003-0026 札幌市白石区本通1丁目南2-38 北海道自然保護協会気付 北海道野鳥愛護会 ☎(011)876-8546
HPのアドレス <https://aigokai.org>